

初任者指導の任について思うこと

宮野 真也（教育・昭和56年卒）

定年退職後、再任用ハーフ勤務で初任者指導に携わり3年目となります。

毎年3名ずつ、計9名の初任者を受け持つことになりました。そのうち、香川大学教育学部出身者は1名のみでした。自分自身の現役の頃と比べ、一抹の淋しさを覚えます。

一方、週に1日ほど勤務する小学校の多くで、香川大学出身の若い先生方が笑顔で挨拶をしてくれます。私が附属坂出小学校副校長をしていた頃に教育実習に来ていた人たちです。彼らが学級担任として、また、体育主任や現職教育副主任として、学校になくてはならない存在となって活躍する姿を見て、こちらまでうれしくなります。

2年目の4月、あることに気づきました。「初任者は言葉にしないが、案外難しいと思っているのは板書ではないか。」ということです。

まず、力の入れ具合に慣れていません。チョークを持たない手が行き場を失ったようにふらふらと動きます。筆圧が十分でなく、文字がくっきりと見えません。

次に、筆順や文字の形に問題があります。漢字の筆順はもちろん、ひらがなの筆順を間違えます。「も」「よ」「せ」などです。文字の形も間違ったイメージで覚えているようです。「え」の終筆がはらいになる、「す」が縦長になるなどです。

彼らに聞くと、確かに困っているとのこと。男性、女性ともに共通していました。さっそく特訓を始めました。このときは、コロナ禍で臨時休校となった4、5月に板書の特訓ができました。小学1年生の書き方の教科書を手本にして、毎日30分の板書練習を2週間欠かさず続けること。パソコン入力のブラインドタッチを覚えるのと同じ要領です。

教育の現場が厳しくなる中、進んで飛び込んできた彼らです。この特訓を見事に克服して、日々の板書に自信をもっていきました。

本年度の初任者3名にも同様の課題が見られました。今回は、夏休みの間に特訓を課しました。きっとすぐに克服して、日々の授業をより充実したものにしてくれるものと期待しています。